



SHANZAI

Rissho Kosei-kai

Special Issue

New Year's Dharma Guidance by President
1
2013

年頭法話

『学び、実践する』

立正佼成会 会長 庭野日鏡

幾多の苦難を乗り越えてきた祖先の
「七転び八起き」の精神を受け継ぎ

あけまして、おめでとうございます。

東日本大震災が起きてから、二度目の新年を迎えました。いまだ三十二万人を超える方々が、避難生活を送られています。復旧・復興には、な



お多くの時間が必要でありましょう。

昨年も申し上げましたが、日本は、自然災害が多発する国であり、これまでも数々の大地震、大津波に遭ってきました。その都度、私たちの祖先は、苦難を乗り越え、今日の日本を築いてこられました。そうした「七転び八起き」の精神を受け継ぎ、心を一つにして、今まで以上に良い社会や国を創造していきたいと願っています。本会としても、継続的に、できる限りの支援をさせて頂きたいと思います。

東日本大震災によって、いま日本は、さまざまな面で転機を迎えているといわれます。とりわけ福島原発の事故は、広い範囲で、甚大な被害を及ぼしています。原発から生じる放射性廃棄物、「核のゴミ」の問題も深刻です。半減期が数万年という物質もあると聞きます。今後のエネルギーのあり方は、子孫に対する責任を果たす意味でも、長期的な視野に立って議論し、判断する姿勢を忘れてはならないでしょう。

さらに最近では、中国をはじめとする近隣諸国との関係が難しい状況に陥っています。国家

間のみならず、国民レベルでも、感情的かつ強硬な態度が強まっていることは、憂慮すべきことです。怒りに怒りで応じ、力に力で対抗することは、絶えることのない不信と争いの連鎖を生み出します。「宇宙船地球号」の同乗者として、冷静さ、誠実さをもって対話を重ね、一乗の世界、大和大和・調和の世界を目指すことが、宗教者として、また日本人として、大事な姿勢でしょう。

本会は、先ごろ、『真に豊かな社会をめざして——原発を超えて』（声明文）、『「憲法改正」に対する見解～憲法の「平和主義」を人類の宝に～』を公表しています。これらも参考にして、一人ひとりが主体的に、今後の日本のあり方を見定めたいものであります。

三宝帰依の意義を踏まえた信行方針 一人ひとりが理解深め、日々実践を

さて、平成二十五年次の信行方針を、私は、昨年と同様の内容とさせて頂きました。それは、次のようなものです。

本会は教団創立六十周年（平成十年）以来、『一人ひとりの心田を耕す佼成会』の総合目標を掲げています。

そして、七十周年（平成二十年）からは、全会員へのご本尊勧請を推進し、取り組んでいます。

このような歴史的過程により、仏教の三宝帰依の基本形態が、本会においては確立するに到りました。

いよいよ私たちは、世の中が大和・調和する上で大切な積尊の精神及び開祖さま・脇祖さまの精神である、慈しみ思いやるこころ（明るく 優しく 温かく）を深めて、人間としての道を歩んでまいりましょう。

付記一

私たちは、東日本大震災により、お亡くなりになった方々への慰霊・鎮魂の礼を忘れることなく、尽くしましょう。

古典の言葉に「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を育てるのに及ぶものがない」とあります。

この中には、今後の世界に思いを馳せる時、食料安保の問題、原発・環境問題など、種々、私たちの眼を開かせるものがあると思います。穀物・樹木を植える体験をすること、人材育成への取り組みをすることなど、個人レベル・支部レベル・教会レベル・教団レベルで、取捨選択して実践し、地域社会・国家・世界に貢献いたしましょう。

この信行方針は、本会に仏教の三宝帰依の基本形態が確立した歴史的な意義を踏まえ、今後、大事にすべき方向をお示したものです。

一人ひとりが、一層理解を深め、日々の実践に結びつけて頂きたいと念願しています。

私たちは、開祖さま、脇祖さまを通じて、いま積尊の教えに出遇わせて頂いています。その



教えは、単に知ることだけでなく、日常生活の中で実践するところに真価があるといえます。「学ぶ」という言葉は、真似をする、「真似ぶ」が語源とされています。本会の会員にあてはめるならば、釈尊の教えやサンガの言行に触れ、「自分もそうになりたい」と願い、真似て、実践することが、「学ぶ」の意味合いです。

「習うより慣れよ」という言葉もあります。最初は、難しく思えることも、繰り返し実践することで、次第に慣れ、やがては身についていくということです。

私たちは、ついわがままにふるってしまい、問題を起こし、そこで教えに返り自分を省みる——そうしたケースがしばしばあります。未熟なときには、それも仕方のないことですが、「いま、ここ、われ」の精神で、常に教えを実践することほど肝心なことはありません。私は、それを体現されたのが開祖さまであると思っています。

開祖さまは、本会を創立し、今日の教団に導いてこられました。また、WCRP(世界宗教者平和会議)の創設、発展などにも心血を注がれました。その過程では、数々の誹謗、中傷も浴びたことでしょう。胃潰瘍、十二指腸潰瘍になり、手術をされたこともあります。開祖さまも、人知れず、心痛を感じておられたのでしょう。

そうした中であっても、開祖さまは、愚痴をいわず、泣き言をいわず、いつも落ち込まず、相手を非難することも決してなさいませんでした。そして、太陽のように、すべてを笑顔で受け容れてこられました。このことは、天賦の才のように思いが

ちですが、私は、開祖さまが、仏法の如く生きることを自らに課し、常に教えを実践し続けてこられたのだと受けとめています。

この開祖さまの実践・精進に倣い、私たちも、実践を重ねてまいりたいと思います。

蓮の花のように美しく生きることが 妙法蓮華経を信じ、行じる者の役割

人間は、生きている限り、困難から逃れることはできません。東日本大震災の直後、私は、次のようにお話ししました。

「蓮華は、泥の水が濃ければ、濃いほど、大輪の花を咲かせます。今回の震災を、ただ単に悲劇として終わらせるのではなく、皆が、人間としてさらに大きく成長する機縁とすることが大切ではないかと思います」

このことは、どのような困難に直面しても、常に心したいことです。

蓮の花には、三つの大きな特長があるといわれます。

一つは、「華果同時」ということです。普通の植物は、花が咲き終わってから実がなりますが、蓮は、花が咲くのと、実がなるのが同時です。それは、「因果不二」ということでもあり、原因と結果が一つになって区別がないことの象徴とされています。つまり、蓮が泥を栄養とするように、つらく、悲しい思いをしたからこそ、悟りに到ることができることを意味しています。

二つ目は、「汚泥不染」です。蓮は、泥水の中から立ち上がります。にもかかわらず、まったく





汚れのない綺麗な花を咲かせます。従地涌出品に、「世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し」とありますが、世の中の自己中心的な価値観に染まらず、教えに順って生きる大切さが示されています。

さらに「蓮にあだ花なし」といわれます。蓮は、咲きそこなったりせず、すべてがほぼ完璧に花を咲かせます。それは、「一切衆生悉有仏性」——一切の生きとし生けるものの尊さ、その可能性を表しているといえます。

大聖堂の周囲にも、夏になると、たくさんの蓮の花が咲きます。大輪も見事ですが、小さな花も可憐で心を打たれます。自分なりの花を精いっぱい咲かせることが大事でしょう。そうした蓮の花のような人間に、一人ひとりが増えていくと同時に、家

庭や職場、地域、大きくは国や世界を、蓮の花のように美しくすることが、妙法蓮華経を信じ、行じる者の役割です。

教団では、平成二十四年次から、第十一次教団運営計画が実施され、メインテーマを、『生かされ、生きるチカラ。～明るく 優しく 温かい人づくり～』としています。信行方針にもある「明るく 優しく 温かく」とは、本会会員にとどまらず、誰もが大切にすべき普遍的なテーマです。人間関係はもちろん、地域や国、国際関係にも通じる精神です。

このことを心に刻み、あらゆる局面で、実践に結びつけていく一年にしたいものであります。